

Title	日葡交通の起原(日葡協會編)
Sub Title	
Author	吉田, 小五郎(Yoshida, Kogoro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.1 (1928. 3) ,p.147- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280300-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

博物館の施設研究の爲め印度・希臘・伊・獨・佛・英・米國に巡視を命ぜられて、近日發途に就かれるが、行中無恙、充分に視察あつて、帝室に對しては勿論のこと、學界に多大の新收を齎せられむ事を切望して擲筆する次第である。(昭和二、十二、一夜、武田勝藏)

日葡交通の起原 (日葡協會編)

(種子島建碑紀念發行パンフレット)

歐人の所謂『日本の發見』者の榮譽を擔ふものは云ふまでもなく、西洋近世史の初期に當つて、最も活躍せし葡萄牙人である。

かの葡人渡來して凡そ一百年間、宗教上の禍を以て追放の厄にあふまで、精神、物質兩方面に於て我が國人に與へし刺戟、影響の大なりしことは、今更言を俟たず、其の國交斷絶後と雖も、陰然一勢力をなし、此の間の消息を具さにかがうなら、寧ろ思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

輒近南蠻、切支丹、和蘭陀等凡そこと異國に關するもろくの史話頓に流行し、従つて日葡關係の史實に注意を向くる者亦少くない。時宛も昨年十一月、日葡協會の發起により、葡人初めて上陸せる種子島種子村大字西の表に『日葡親交紀念之碑』が新たに建立せられ、之が機會に、日葡兩國關係の起原を明かにして以て、世の注意を促さんとして上梓されたのが本書である。四六版約百五十頁。『日葡親交紀念之碑』並びに其の碑文『種子島所傳の鐵砲』『慶安二年中野道伴刊行の「南浦文集」』『フェルナン・メンデス・ピントの「巡廻記」初版の扉』(以上寫眞版)と十五・六世紀に於けるポルトガルの勢力圖及び薩南諸島の地圖(以上凸版)二葉が添へてあ

る。

冒頭、駐日葡國公使ジョゼ・ダ・コスタ・カルネイロ氏の Resumo Cronologico dos Descobrimentos Portugueses と題する葡文約四十頁にわたる序文あり次に山口鐵次郎の手になれる右の譯文(自由譯と私は感じた)を添へてある。簡單ながら近世葡萄牙の發見事業の一般を知り得て面白く、殊にお國柄の人の筆になることとして興趣は一段と深い。かくて本文たる岡本真知氏の『ポルトガル人種子島漂着の事實』(一八七二頁)之に續き、附録として『主要なるポルトガルの航海者』『門倉崎の鐵砲傳來紀功碑文』『ポルトガル人種子島初來に關する資料』が加へられてゐる。

岡本氏は葡語に精通してゐられ、日葡關係の史實に明るく、又葡萄牙國に於ける此の方面の研究は之をひろく涉獵してゐられるものゝ如くである。

氏は先づ本題に入るに先だち葡人漂着の舞臺と背景とに供せんが爲、比較的多くの頁を『ポルトガル人東航の始め』『日本及び支那の國情』『極東海上の有様』『ポルトガル人の支那進出』『種子島の事情』にさかれた。本論に入つては葡人漂着に關する左の六記録即ち一、文之の『鐵砲記』二、ピントの『巡廻記』三、ガルマンの『諸國發見誌』四、コウトの『アデア十篇史』五、エスカランテの『報告』並びに、六、アシュエダ舊王城圖書館藏未刊『日本教會史』を擧げて比較検討され次の結論に達せられた。

(一)記録として比較的信用し得られるガルマン、コウト、エスカランテ、「日本教會史」の著者の記述によつて、アントニョ・ダ・モッタ、フランシスコ・セイモト、アントニョ・ヘイショットの三人

のポルトガル人が一五四二年(天文十一年)に暹羅から一ツヤンクに投じ途中海上の暴風に吹かれて種子島に漂着した。

(二)最も詳細に著述せられたフェルナン・メンデス・ピントの「巡廻記」と大龍寺文之の「鐵砲記」によつて、ときは九月末であり、ところは西村の小浦(南種子村大字西門倉崎東西野浦)であらうかと推定せられること、そこからは首邑赤尾木(今西の表)に廻航し洋式の鐵砲を傳授した。

(三)「日本教會史」とエスカランテの報告で見れば、種子島に漂着する迄には琉球へポルトガル人が始めて來てゐるらしいこと、漂着の事實には直接間接に支那の海賊船が働いてゐたらしいことである。

いづれも穩健にして尤もなる説といふ可きであらう。以上私は本書紹介の筆を擱くに當り、一、二思ひ出づる儘を述べて結びにかへよう。

(一)ピントの『巡廻記』はその世にあらはれてより、世の人はその内容の奇怪に驚くのみ、荒唐無稽信するに足らずとされ、哀れその痛快曉舌なる著者は、*“prince of hairs”* (ヒルドレッツス、日本古今記附録) とまで痛罵せられた。然るに近時研究の結果は彼の言必ずしも退く可きにあらずとして彼の爲に辯せんとするもの多きに赴く趨勢にある。岡本氏も明らかにその一人であるが、而もピントが種子島の領主を時堯とせずして *Nautiquin* と稱せしを出鱈目とせられた。(六十九頁) 然るに此の *Nautiquin* (こ) 時堯の前名直時 (*Nautiquin* を直時にあてたる説、大島富士太郎氏の創意にかかると幸田成友先生より傳へ聞く) に外ならぬのであつてピント

トが時堯とせずして *Nautiquin* の名を以てせしことは誠に自ら種子島に漂着せる一人なりとするピントの言の偽ならざることを證し、合せてピント等漂着の年代を天文十一年(一五四二年)におくことの又真なることを裏書する鍵鏹を與へるものである。たゞ惜しむらくは時堯が果して正確に何時の頃まで直時と稱せしやを明らかにす可き信憑すべき記録文書の現存するや否やを知らぬけれども、岡本氏がその參考資料の中に擧げてゐられる千部廣濟氏の『南蠻小銃筒』の第二頁「贈四位種子島時堯履歷」の條に「始直時と稱し世に立つに及び時堯と改む」とある。今假に此の千部氏の記載を信じて、直時世に立つに及んで時堯と改めたものとすれば時堯が直時の後を嗣いだのは天文十二年(一五四三年)三月の事であるから、直時が時堯と名を改めたのは此時であらう。されば時堯が未だ直時を稱せし天文十二年三月以前の葡人漂着の日即ち八月を求むれば當然天文十一年(一五四二年)のこととなり、*ガルマン*、*コート* 並びに日本教會史の漂着年代と符合することとなり、ピント自らが漂着の年が一五四五年となすは明らかにピントの誤記であり、彼がその以後に來り而も直時が時堯と改名後のことがわかる。かくてピントが直時改名後も依然として *ナウタキンを稱してゐるのは彼が最初の印象深くそのまゝ之を用ひた爲であらう。*

(二)次に考へらるゝことは漂者せし葡人の名である。或ひは『鐵砲記』の記載を重んじ(坪井氏の如き)或ひは *ガルマン*、*コート* の記載を信じてピントの記載を前後漂着の人名を混交するものとなし(岡本氏の如き)或ひは *ガルマン*、*コート*、ピントの孰れをも生かさんと欲して二組の葡人が別々に日本を發見したりとなす

(シャルポアの如き)等種々の説あり、之れ畢竟、種々の記録に見えたる葡人の氏名を異にするより起れる論なることは云ふまでもない。今之等種々の記録に見えたる人名を表示すれば凡そ次の如くである。

ピント巡廻記	文之鐵炮記	ガルバン諸國發見史 コート・アジア十篇史	エスカラ ンテ報告
デイゴ・ゼイ モト	牟良叔舍	アントニオ・ダ・モ タ	二人の葡人 (人名を記 さず)
クリストワー ン・ポラリヨ	喜利志多佗 孟太	フランシスコ・ゼ イモト	
ピント		アントニヨ・ハイ シヨット	

いづれ之等五種の記録も恐らく同一の事件を取り扱つたものであらう。然し之を徒らに氏名を置換接合してあへて符合せしめんとして技巧に過ぎたるは如何なるものであらうか。

なほ本書を通讀するに當つて不快に思つたのは餘りに誤植の多きことである。添へられたる正誤表の他になほ多數の誤植がある。本の性質上殊に遺憾に感じた。

最後に非賣品たる本書を特に惠與せられた東京外語のピント先生に謝意を表しておく。(吉田小五郎)

近世日葡通交小史

(岩生成一著
葡國割領事蔵版)

日歐間の交渉開始の日は、即ち葡萄牙人渡來の日で、同日は我

書評

近世史上重大なる意義を有する。この渡來に據つて、我が戦術上に一大變革を與へた武器即ち鐵砲の傳來あり、次いで徳川幕府の蛇蝎視せる耶蘇教の傳播等あつて、爾來約一百年間、布教の禍よりして國交斷絶に至るまで時に波長は免れかれざるも兩國の親交は繼續し、其の間精神的に將た物質的に我國文物發達等に貢獻したる處甚大である。然るに其の通交の史實、文化輸入の事迹等に於て、未だよく世に現れざるものがある。大阪の藤澤友吉氏、多年葡國名譽副領事として兩國通商上に盡力せられて居るが、常にこれを遺憾として、今次同方面の史實に精通の岩生文學士に囑して如上の事實を略述せしめ、題して『近世日葡通交小史』と稱し、上梓の上各希望者に頒布せられた。筆者も亦其の惠贈に預つた一人で、この奇特な藤澤副領事の企畫に敬意を表し、且つ著者岩生氏の勞を謝す爲めに本書を紹介する次第である。本書は凡そ四章に分たれて居り、

第一章葡萄牙船渡來以後織田時代に至る通交に於て、葡人の渡來より耶蘇の傳來と其の傳播と九州諸港の葡萄牙貿易に就て説き、

第二章豊臣時代に於ける通交に於て、秀吉の禁教令とゴアの使節並に九州耶蘇教學林の盛衰を述べ、

第三章徳川時代初期に於ける通交に於て、家康の開國方針、有馬氏の葡船擊沈、耶蘇教禁壓と葡貿易の逼迫並に島原亂に因して兩國通交の斷絶に至る次第に及び、

第四章日本と葡萄牙との文化關係に於て、活字印刷機の將來と兩國文學上の交渉、洋畫の傳來と銅板畫の版行、醫術と耶蘇教傳

(IR) 一四九